

ハンドボール競技におけるゴールキーパーのパス出しに関する運動学的研究

宇夫方宏規(1513008)

<序論>

○研究動機・研究目的・研究方法

筆者は、中学生の頃からハンドボールのゴールキーパーとして活動してきた。攻守の入れ替わりが激しいハンドボール競技において、ゴールキーパーはディフェンスの最後の砦としての役割はもちろんのこと、オフENSにおいて最初の攻撃者となる、非常に重要なポジションである。ゴールキーパーのパス一つで試合の流れが大きく変わることも多々あるが、筆者はこのパス出しを苦手としてきた。その苦手を克服し、後進の指導に活かすために、世界トップレベルのゴールキーパーのパス出しについて研究したいと考えた。

本研究の目的は、発生運動学の立場からゴールキーパーのパス出しの場面での動きかたの構造を明らかにし、類型化することである。研究の方法としては、2015年1月15日から2月1日までカタールで開催された第24回世界男子ハンドボール選手権の決勝ラウンドのうちの6試合を原資料とし、ゴールキーパーのパス出しの典型的な場面において、特にボールの処理からパスの動きかたを対象に、「共同的ゲーム分析」を用いて観察分析を行った。

<本論>

○ゲームの運動観察について

ゴールキーパーのパス出しの場面を研究するにあたって、マイネル(K.Meinel,1981)の運動モルフォロジー的考察方法の中の「印象分析」およびそれを発展させた金子(2007)の「縁どり分析」を観察の基盤とした。「印象分析」とは他者観察における不可欠な前提となる分析方法であり、運動現象に表れる諸徴表をとらえ、厳密な分析をしていくための重要な手段となる。「縁どり分析」とは、現象学的な形態分析が意味されており、その対極に位置している精密科学的分析とは截然と区別されなければならない。動感形態の類的普遍化の段階を高めることによって、だれにとっても、いつでも他の動感形態から区別できるようにしていくものである。実際の運動観察においては球技としてのハンドボールの特性を鑑みて、佐藤(2015)の「共同的ゲーム分析」を用いて、間主観的な観察分析ができることを明らかにした。この際、パス出しの構造特性を把握するにあたってマイネルの8つの運動カテゴリーのうち特に「運動の局面構造」、「運動リズム」、「運動伝導」、「運動の先取り」および「運動の正確さ」の観点から分析、記述を試みた。

○運動観察の実際

観察分析の際には、原資料の中から典型的な場面を抽出し、パス出しの一連の動きかたの分析、記述を行った。その結果、パス出しの運動構造の成り立ちを、次のように明らかにした。

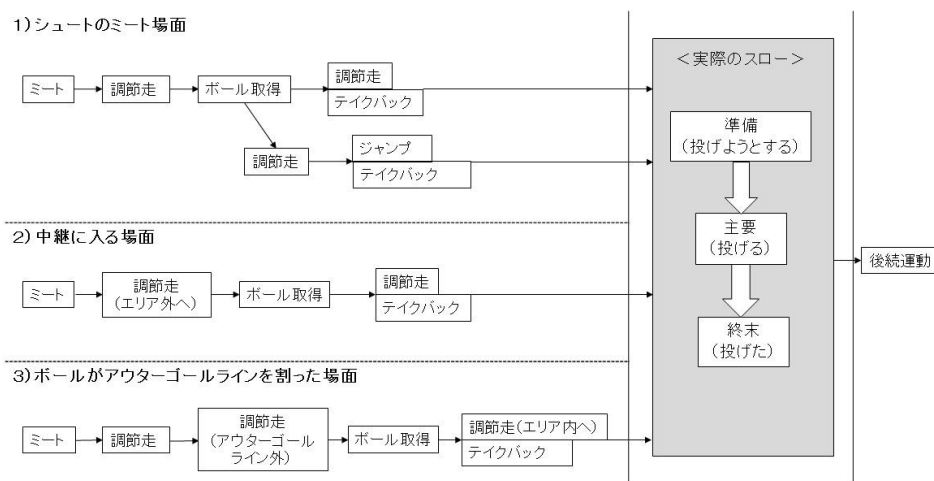


図1 ゴールキーパーのパス出しにおける運動経過の成り立ち

さらに、それらの動きかたを以下のように類型化した。

- ①即時・オーバーハンド系（ショート）
- ②即時・オーバーハンド系（ロング）
- ③即時・ジャンプパス
- ④待機・オーバーハンド系（ショート）
- ⑤待機・オーバーハンド系（ロング）
- ⑥中継系
- ⑦ゴールキーパースロー系
- ⑧フリースロー系

<結論>

本研究では、ハンドボール競技におけるゴールキーパーのパス出しの動きかたの構造について、観察記述することによって明らかにした。その結果、ゴールキーパーのパス出しの動きかたを8通りに類型化できた。どのような場面でも、本人やボールの状態、味方と敵の位置関係に応じて最適なボールの処理、取得、ステップや助走、テイクバックを瞬時に選択し、実行していくことが重要である。典型的なゴールキーパーのパス出しを明らかにすることで実際の練習でも状況に応じた最善のプレーの仕方をモデルにすることができるようになる。本研究で明らかにしたパス出しの類型化に基づいて攻撃戦術が体系化できれば、ゴールキーパーだけでなくチーム戦術の手段も多様化していくと考える。

（引用・参考文献省略）